

本日より旧岩崎邸庭園にて開催

「江戸東京リシンク展 – 旧岩崎邸庭園でみる匠の技と現代アートの融合 –」

江戸うちわ・江戸扇子、江戸刷毛・東京手植ブラシ、江戸組子、新江戸染、
和太鼓、東京くみひもなど、東京都の伝統産業とのコラボレーション作品を多数公開

江戸東京きらりプロジェクトによる「江戸東京リシンク展」の開催

江戸東京の伝統に根差した技術や製品などを新しい視点から磨き上げ、世界へと発信していく「江戸東京きらりプロジェクト」は、現代アートの分野で国内外問わず幅広く活躍する館鼻則孝を展覧会ディレクターとして招聘し、展覧会「江戸東京リシンク展」を、2024年3月1日（金）より開催いたします。本展覧会では、東京都の伝統産業事業者を館鼻則孝のコラボレーターとして迎え、「日本文化の過去を見直し現代に表現する」という館鼻則孝の創出プロセスである「Rethink（リシンク）」を起点として、歴史ある伝統産業の価値や魅力を新たなかたちで提案します。本年は、新たに制作されたアート作品や伝統産業事業者が保有する貴重な歴史的資料を、国の重要文化財である旧岩崎邸庭園にて公開いたします。2021年より毎年継続して開催している本展覧会ですが、本年は江戸うちわ・江戸扇子 伊場仙や、江戸刷毛・東京手植ブラシ 宇野刷毛ブラシ製作所など、新たな事業者を迎えた新作もお披露目されます。是非、実作品が一堂に集まるこの機会に「伝統産業の匠の技と現代アートの融合」を旧岩崎邸庭園にてご覧ください。

[画像] 江戸東京リシンク展メインビジュアル

開催概要

- 【展覧会名】 江戸東京リシンク展 – 旧岩崎邸庭園でみる匠の技と現代アートの融合 –
- 【開催期間】 2024年3月1日（金）～2024年3月10日（日）午前9時～午後5時（入園は午後4時30分まで）
- 【告知URL】 <https://edotokyokirari.jp/news/life/edotokyorethink2024/>
- 【主催】 東京都・江戸東京きらりプロジェクト
- 【共催】 公益財団法人東京都公園協会
- 【会場】 重要文化財 旧岩崎邸庭園（東京都台東区池之端 1-3-45）
- 【入園料】 一般 400円 65歳以上 200円 ※小学生以下及び都内在住・在学の中学生は無料
- 【出展事業者】 江戸うちわ・江戸扇子 伊場仙、江戸刷毛・東京手植ブラシ 宇野刷毛ブラシ製作所、江戸組子 建松 新江戸染 丸久商店、和太鼓 宮本卯之助商店、東京くみひも 龍工房、金唐革紙 金唐紙研究所（特別協力）



展覧会ディレクターを務める現代美術家 舘鼻則孝からのメッセージ

江戸東京きらりプロジェクトのコンセプトである“Old meets New”。

東京には、江戸、明治、大正、昭和、平成、令和の時代にまで続く、数多くの「老舗」が存在しています。そして、そこにはさまざまな技、文化、伝統が息づいている。そうした東京の魅力を国内外に伝えたいという思いからスタートしたのが本プロジェクトになります。今回、その活動の一環として開催される「江戸東京リシンク展」に、私は、作家としてだけでなく、展覧会ディレクターとしても参画しています。私はこれまで“Rethink”という言葉に冠した展覧会をいくつか開催してきましたが、本プロジェクトのコンセプトである“Old meets New”と“Rethink”という概念は多くの共通点を有していると考えています。

“Rethink”が意味するところを簡略化して言うなら、途切れることなく続く日本の伝統、あるいは文化を、現代においてそのまま再現するのではなく、現代的な意味を加えて表現するということです。そのため、私の作品はすべて、日本のこれまでの歴史、文化があっこそ、成立しているとも言えます。その点において、“Old meets New”と“Rethink”は同義であり、だからこそ、これまで数多くの伝統工芸、伝統芸能とコラボレーションする形で、過去と現在をつなぐ活動をしてきたのです。時代は変わっても変わるべきでないもの、時代が変わるからこそ変わるべきものを見極め、伝統を次の100年に残していくために、今、私たちが何をなすべきか。伝統をどう現代的な意味づけをして打ち出していくか。今回の展覧会は、東京の魅力を伝える場であるとともに、私たち自身がリシンクするための機会でもあるのです。

舘鼻則孝（たてはな のりたか）プロフィール

1985年、東京都生まれ。東京藝術大学美術学部工芸科染織専攻卒。卒業制作として発表したヒールレスシューズは、花魁の高下駄から着想を得た作品として、レディー・ガガが愛用していることでも知られている。現在は現代美術家として、国内外の展覧会へ参加する他、伝統工芸士との創作活動にも精力的に取り組んでいる。作品は、ニューヨークのメトロポリタン美術館やロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館などに永久収蔵されている。

[写真] 舘鼻則孝とコラボレーション作品 ©Edo Tokyo Kirari Project, Photo by GION

「江戸東京リシク展」に出展する伝統産業事業者の一覧



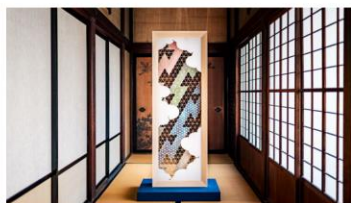
舘鼻則孝 × 江戸うちわ・江戸扇子 伊場仙

ひとつの絵の中に一对の要素を内包した《Duality Painting》という、舘鼻則孝氏の絵画シリーズの延長線上の作品として制作された江戸扇子。左右に向いた蛇腹状の面を活かして絵図を表現し、異なったモチーフを1枚の扇子に表している。また、「大満月うちわ」と呼ばれる江戸うちわに描かれた満月の図案は、本作のために描き下ろされた新作。江戸うちわは、1本の竹を裂いて仕立てられており、その緻密な手仕事には扇子同様に工芸的な魅力が詰まっている。



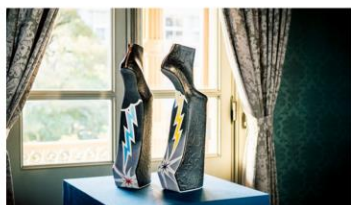
舘鼻則孝 × 江戸刷毛・東京手植ブラシ 宇野刷毛ブラシ製作所

現代では量産を目的として機械化された工程が多い中、手植えにこだわったブラシや刷毛を作り続ける宇野刷毛ブラシ製作所。舘鼻則孝氏とのコラボレーションでは、古くから職人に愛用されてきた「左官ブラシ」を絵画作品の仕上げに転用することで新たな作品が誕生した。画面上で左官ブラシを引くことによって生じる、縞状の痕跡を意匠として活かすことを意図した技法研究がなされ、絵画の世界では筆致と呼ばれる筆遣いとして画面に刻まれている。本作に用いられた左官ブラシには、弾力性のある馬の毛が使われており、最も長いものでは横幅60センチのものも特別に製作された。



舘鼻則孝 × 江戸組子 建松

繊細な組子細工を活かした多様なものづくりを得意とする建松とのコラボレーション作品では、組子細工による伝統的な幾何学文様と舘鼻則孝氏がアクリル絵の具で描く雷雲のモチーフがレイヤーとなって表現されている。「桜亀甲」「二重麻の葉」「桔梗亀甲」「雪型亀甲」——上から順に並ぶ文様が表現しているのは「春夏秋冬」。それらの中でも麻の葉や桔梗というモチーフには、魔除けの意味があり、舘鼻氏が描く「雷雲」も同様の意味を持つことから、それぞれの文様同士がリンクしている。



舘鼻則孝 × 新江戸染 丸久商店

注染と呼ばれる伝統的な染色技法で染め上げられた《Heel-less Shoes》のアウトソールには、舘鼻則孝氏のシグネチャーでもある雷雲の意匠が施されている。作品の背の高さを活かした上下に広がる図案には、注染による特徴的な「ぼかし」が施されており、職人による技法的なこだわりと舘鼻氏による意匠化へのこだわりが重なり合うことで成立している作品。1枚の型紙にもかかわらず、多くの鮮やかな色彩で同時に染色することが可能な技法の特性を活かした内容となっている。



舘鼻則孝 × 和太鼓 宮本卯之助商店

雷鳴を神仏の来臨に擬えて、雷神の持つ雷鼓を表した作品。玩具太鼓と呼ばれる4.5寸の小さな太鼓を活用して制作された。宮本卯之助商店の職人が制作した太鼓に舘鼻則孝氏のアトリエで彩色を施して完成させた。本作に使用されている太鼓は、皮を張る前、乾燥させる工程で歪んでしまったり、割れてしまったことで、製品にすることが叶わなかった昭和50年代のもの。飾り結びには、龍工房の正絹製の組紐が用いられている。



舘鼻則孝 × 東京くみひも 龍工房

本作のために新たに考案された組み方で組まれた正絹製の「角紐」は、表と裏で色が異なる。これは、江戸の粋な美意識とも言える着物の羽裏から着想を得たもので、一見モノトーンに見える作品の差し色として豊かな表情を生んでいる。背面に施された飾り結びは、「吉祥結び」と呼ばれ、良いことが起こる兆しの象徴として古くから扱われてきた。60ミリのピッチで正確に「結び」を入れることで、立体的なテクスチャーを与え、それらが集合することで現れる表情は作品の重要なアクセントとなり、「藤四ツ組」で組まれた丸紐に入った屈曲した差し色のラインが抑揚ある見え方を演出している。



舘鼻則孝 × 金唐革紙 金唐紙研究所【特別協力】

本展では、特別協力という形で参画した金唐紙研究所によって制作された金唐革紙を用いて、舘鼻則孝氏が完成させた《Heel-less Shoes》。「金唐革紙」は、江戸時代にヨーロッパから渡ってきた「金唐革」と呼ばれる装飾革を見た日本人が、和紙を使って模したことで生まれた。しかし、明治期以降、海外に輸出されるほどの人気を博したが、次第に需要は減少し、昭和中期には、製造技術も途絶えてしまったという。本展の会場となった旧若崎邸庭園の洋館内装にも用いられており、それらの復元に尽力したのが、1985年に金唐紙研究所を設立した、国選定保存技術保持者の上田尚氏です。

フォトクレジットは全て ©Edo Tokyo Kirari Project, Photo by GION

「江戸東京リシンク展」に出展する伝統産業事業者の一覧



江戸うちわ・江戸扇子 伊場仙（えどうちわ / えどせんす・いばせん）

天正 18 年（1590 年）創業。400 年以上の歴史を誇る団扇と扇子の製作販売を行う老舗。江戸後期には、初代歌川豊国、歌川国芳、歌川広重といった著名な浮世絵師を起用した団扇が人気を博した。江戸団扇は一本の竹を割いて仕立てるのが特徴であり、江戸扇子は太めの骨で骨数が少なく折り幅が広いことが特徴である。



江戸刷毛・東京手植ブラシ 宇野刷毛ブラシ製作所

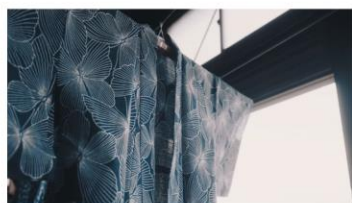
（えどはけ / とうきょうてうえぶらし・うのはけぶらしせいさくしょ）

大正 6 年（1917 年）創業。刷毛づくりで培われた技術をもとに刷毛・ブラシの製作をてがけている。中でも天然毛は毛質を見極めることから始まり、動物や植物など特性を踏まえ様々な用途に対応している。特に職人の手植えによる耐久性の高い洋服ブラシなどは好評である。



江戸組子 建松（えどくみこ・たてまつ）

1982 年、江戸川区にて創業。「組子細工」の端緒は、平安時代に生まれた日本建築の建具であり、釘を一切使うことなく、小さな木片を手作業で組み合わせてさまざまな模様を編み出すことができる。伝統的な組子細工の模様は、桜や麻の葉、雪など日本の自然をモチーフにしたものが多く、豊作や長寿など人々の願いが込められている。



新江戸染 丸久商店（しんえどぞめ・まるきゅうしょうてん）

明治 32 年、日本橋堀留町にて創業した注染製品の間屋。注染は主に浴衣や手拭に使用されてきた染色技法であり、創業以来、さまざまな柄や図案を産み出し、日本の芸事、季節のお祭りに彩りを添えている。



和太鼓 宮本卯之助商店（わだいこ・みやもとうのすけしょうてん）

文久元年(1861年)、太鼓店として創業。太鼓・神輿の製造・販売を中心に事業を拡大。創業以来、宮本卯之助商店は祭と伝統芸能の保存と発展を使命とし、祭の持つ人々を繋げる力、世界に誇れる伝統芸能という日本の佳き伝統の継承に貢献している。



東京くみひも 龍工房（とうきょうくみひも・りゅうこうぼう）

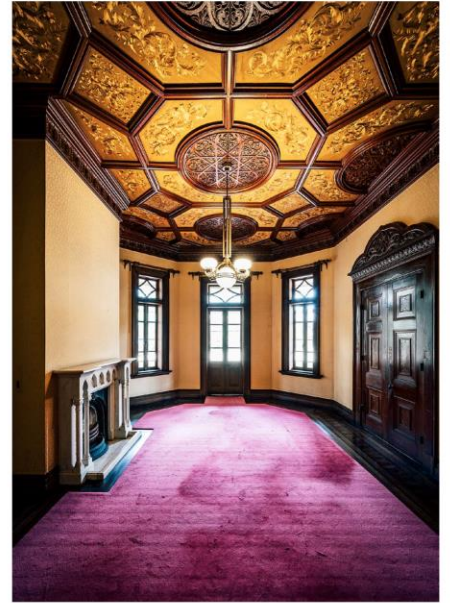
1963 年に創業以来、組紐にあった糸づくり、染色・デザイン・組みまでを一貫して行う都内で唯一の工房。伝統的な組紐だけでなく、先代から受け継がれてきた技術とノウハウから組紐を進化させ、2019 年に日本で開催されたラグビーワールドカップでは、メダルリボン・参加記念敷布を、耐久性と伸縮性を重視した純国産シルクの組布で製作した。



金唐革紙 金唐紙研究所 [特別協力]

（きんからかわし・きんからかみけんきゅうじょ）

江戸時代にヨーロッパから渡ってきた、金唐革と呼ばれる装飾革を和紙を用いて日本国内で模索することから始まった金唐紙の復元に従事する研究所。重要文化財「旧岩崎家住宅洋館」や、重要文化財「旧日本郵船小樽支店」などの修復工事に携わっている。



重要文化財 旧岩崎邸庭園

旧岩崎邸庭園は1896年（明治29年）に岩崎彌太郎の長男で三菱第3代社長の久彌の本邸として造られました。往時は約1万5,000坪の敷地に、20棟もの建物が並んでいました。現在は3分の1の敷地となり、現存するのは洋館・撞球室・和館の3棟です。木造2階建・地下室付きの洋館は、鹿鳴館の建築家として有名な英国人ジョサイア・コンドルの設計で近代日本住宅を代表する西洋木造建築です。館内の随所に見事なジャコビアン様式の装飾が施されていて、同時期に多く建てられた西洋建築にはない繊細なデザインが、往事のままの雰囲気を漂わせています。別棟として建つコンドル設計の撞球室（ビリヤード場）は当時の日本では非常に珍しいスイスの山小屋風の木造建築で、洋館から地下道でつながっています。洋館と結合された書院造りの和館は当時の名棟梁大河喜十郎の手によるものと言われています。床の間や襖には、明治を代表する日本画家・橋本雅邦が下絵を描いたと伝えられる障壁画などが残っています。現存する大広間を中心に巧緻を極めた当時の純和風建築をかいま見ることができます。大名庭園を一部踏襲する広大な庭は、建築様式と同時に和洋併置式とされ、「芝庭」をもつ近代庭園の初期の形を残しています。

【公益財団法人東京都公園協会オフィシャルサイト】 <https://www.tokyo-park.or.jp/park/format/index035.html>

[写真：左] メイン会場となる旧岩崎邸庭園 洋館 [写真：右] 旧岩崎邸庭園 洋館内装、Photo by GION



EDO
TOKYO
KIRARI

江戸東京きらりプロジェクト

江戸東京の伝統ある技や老舗の産品といった「東京の宝物」に磨きをかけ、その価値と魅力を世界に発信するプロジェクトです。“Old meets New”をコンセプトに、伝統的な匠の技の中から新たな取組に果敢に挑戦する「モデル事業者」を「衣・食・住」の各分野から選りすぐり、現在、39事業者となっています。新しい視点から江戸東京の伝統ある技、産品を磨き上げることでその価値を高める取組と、SNSや国内外でのプロモーション等、その魅力を発信する取組を行っており、海外向けのECサイトも運営しています。

オフィシャルサイト：<https://edotokyokirari.jp/>

Instagram：https://www.instagram.com/edo_tokyo_kirari

Facebook：<https://www.facebook.com/Edo-tokyo-kirari-638579083261624>



[画像：左] 江戸東京きらりプロジェクトのシンボル

江戸東京きらりプロジェクト
オフィシャルサイト